学びながら ぶらり散策

大田区自然観察路

「雑木林のみち」の生物・植生

～田園調布周辺・崖線と湧水～

東海道新幹線が多摩川を渡るとき、北方に見える緑におおわれた高台は、田園調布台と呼ばれ、宝来公園や多摩川台公園などが周囲の住宅地とともにきわめて良好な環境を形成している。これらの公園は、武蔵野台地特有の雑木林が残っていて、その植生や鳥類、昆虫などが豊富で多様な生態系を育んでいる。

この地域の斜面は、多摩川が武蔵野台地を削り取ってできた立川市―国分寺市―世田谷区に連なる国分寺崖線の南端にあたる。そのため、崖線特有の地形を有しており、崖下には多くの場所で湧水がみられる。

また、この地域は古来より人が住み、集落が発達したところで、規模の大きい古墳が4世紀中頃から多摩川台公園を中心につくられている。現在では公園として管理されているので雑木林の原型をよく残している。

江戸期に崖線に沿って六郷用水が掘削され、水田灌漑用水として昭和初期まで利用されてきた。現在では大部分が暗渠化されているが、中原街道から鵜の木付近まで人工の水路が復元され、田園調布せせらぎ公園内の湧水を集めた清流が崖線の緑とともに快適な散策路を形成している。

なお、多摩川台公園や住宅街の高台からは、多摩川や丹沢山地の上にそびえる富士山の遠景など素晴しい景観が望める。

崖線と湧水

雑木林のみちの

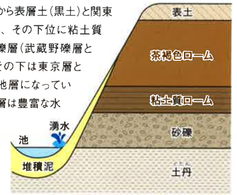
「雑木林のみち」の主な崖線は、多摩川が武蔵野台地を削り取ってできた崖の連なりで、立川市―国分寺市―世田谷区を通って大田区に至り、国分寺崖線と呼ばれる。その他、多摩川の支流が削った崖も多くある。崖線には今も樹林や湧水が多く残り、連続する貴重な自然を形成している。

台地が侵食され、地下水面が露出する場所には湧水が存在する。この地域の台地には10メートル以上におよぶ関東ローム層と、その下部に砂層・砂礫層があり、これが地下水層になっている。湧水は地域の水循環や小川・池の生態系にとって重要である。六郷用水に沿う崖線や田園調布せせらぎ公園の谷頭部には現在も多くの湧水がみられるが、地下水の源になる台地上の降水の浸透が少なくなって、湧水量は減少傾向にある。

東京の名湧水57選（六郷用水）。

崖線の地質構造図

田園調布せせらぎ公園の崖線の地質構造は、上位から表層土（黒土）と関東ローム層があり、その下位に粘土質ローム層、砂礫層（武蔵野礫層という）があり、その下は東京層と呼ばれる厚い地層になっている。武蔵野礫層は豊富な水を含んでいて、井戸水や湧水の貯留槽になっている。



「雑木林のみち」でみられる水辺の生き物たち

「雑木林のみち」には池や水路があり、カメなどのほかに魚がみられる。黒や鮮やかな色のコイに混じってニゴイ、オイカワ、ウグイ、メダカなどが泳いでいる。六郷用水には外来種のソウギョもいて、コイと間違えている人も多い。

コイ（コイ科）

口元に2対のひげがある。雑食性で水草、貝類、昆虫類、甲殻類のほか、小魚も食べる。

ソウギョ（コイ科）

明治時代に輸入される。口ひげはなく、水草のほか、水面に垂れ下がった草も食べる。

ニゴイ（コイ科）

その体型がコイに似ていることからニゴイと呼ばれる。コイより細長く、鼻先が前に突き出ている。口ひげは1対。

メダカ（メダカ科）

流れのゆるい小川や水路に生息し、プランクトンやボウフラを好んで食べる。野生のメダカは絶滅危惧種に指定されている。

アメンボ（アメンボ科）4～11月

水面に集団でいることが多い。冬は水辺を離れ、土中で越冬する。セミと同じカメムシの仲間。

大田区自然観察路『雑木林のみち』の生物・植生

発　行／大田区環境清掃部環境対策課

編　集／（一社）地域パートナーシップ支援センター　　デザイン／松井由莉

写　真／大塚　豊、小野紀之、鈴木百合子、山邊功二

※このパンフレットは区民協働調査を基に、区内環境団体（おおた野外博物館、多摩川とびはぜ倶楽部、おおたく環境探検隊）と協働で作成したものです。

野鳥

雑木林のみちの

雑木林では、四季を通じて採餌のために飛来した樹林性の鳥や渡りの途中の鳥が観察できる。また、池ではカルガモに加え、カワセミや秋から冬にかけてマガモもみることができる。多摩川台公園から多摩川を展望する場所では、双眼鏡などがあればカモ類、サギ類、カモメ類、カイツブリ、カワウ、オオバンなど水鳥も季節によって観察できる。

メジロ（メジロ科）

スズメより小さな黄緑色の鳥。目の周りに白い輪がある。常緑広葉樹林を好む。

ヒヨドリ（ヒヨドリ科）

全体に灰色っぽく、目の後ろが茶色。「ピーヨ、ピーヨ」と甲高い声で鳴く。

キジバト（ハト科）

ドバトより少し小型。全体に薄い茶色で、翼にはウロコ模様がある。首には青い斑点がある。「デ、デッ、ポッポー」とくりかえし鳴く。

アオゲラ（キツツキ科）

緑色のキツツキで、頭に赤い模様。日本の特産種。「雑木林のみち」では、ほかにスズメくらいの大きさで体に白と黒の横じまがあるコゲラもみられる。

コゲラ（キツツキ科）

スズメくらいの大きさのキツツキ。住宅地の公園でもみられるようになってきた。「キー」と鳴く。

ツミ（タカ科）

ハトくらいの大きさ。小さいオスはヒヨドリほどの大きさ。「ピョー、ピョピョピョ」と尻下がりに鳴く。

カルガモ（カモ科）

水辺で一年中みられる。くちばしの先だけが黄色。水辺の草地に巣をつくる。「グェ、グェ」と太い声で鳴く。

マガモ（カモ科）

冬鳥として多摩川や池に飛来。足は橙色、尾は白い。オスのくちばし全体が淡い黄色。マガモを家禽として改良したものがアヒル。

カワセミ（カワセミ科）

スズメくらいの大きさ。青い背にオレンジ色の腹。水辺の枝や岩にとまって、水面に飛び込んで小魚をとる。

ツグミ（ツグミ科）

白い眉班、胸にまだら模様がある。冬鳥として林や多摩川河川敷でみられる。小走りに移動して立ち止まる。